

# あそびはらっぱものごたたり

すとうあさえ

園庭のけやきが作ってくれる木陰に入る暇もなく、お日様のもと、水や砂や土と遊んだ夏。子どもたちは、元気です。では、あそびはらっぱものがたりのはじまり、はじまり。

おさんぽ・おさんぽ

(駒場野公園へ)

雨上がりの落ち着いた日さしの中、きょう、初

めて子どもたちとお散歩に行くことにした。行き先は、筑波大学農学部跡地にできた自然公園、駒場野公園。なるべく車の通らない路地を選んで歩くことにする。三人お休みなので、子どもたち二十人、大人三人。総勢二十三人。

「駒場野公園へ、しゅっぱあーっ」

「オーっ」。

淡路通りを渡り、細い道に入る。

年長さん年中さんが二人ずつ手をつないで歩く。ピンクとオレンジの帽子がびよびよこはねて、小さなお花畑が移動しているみたい。

幼稚園から駒場野公園まで子どもの足で十分位。ところが、私たちの場合はその三倍強の時間がかった。

「あつ、栗の花、発見」

先頭をいく千春さんの声がひびく。すると列は乱れ、だだつと発見現場に向かい、駐車場に落ちている栗の花を拾う。

一段落してまた歩き出す。また、団地の生け垣の前で千春さんの声。

「うすばかげろうの卵、発見」

細いピアノ線が、びっ、びっ、びっとたんぽぽの綿毛のように伸びていて、その先に小さな粒のような卵がついている。私も初めてみたので、子どもたちと一緒に「へえええ」。

こんなふうに、街の中にある小さな自然を鑑賞しながら、駒場野公園に到着。

公園に足を踏み入れたとたん、みんなわあっと走り出した。中央の広場へ行くと、ベンチに腰かけてエレキギターの練習をしているおにいさん、発見。

子どもたちはまわりをぐるりととり囲んで、じいーっと見ている。男の子がしみじみ、「うまいねえ」とつぶやく。若者は果敢にもこやかな笑



顔で練習を続けていた。一方、近くの高校生が、クラス写真の撮影中。四、五人の子どもたちが、カメラマンとならんで撮影を見学している。横一列に手をつないで見ている子どもたちと、照れている高校生たちの様子がおかしくて、私は一人ふき出してしまった。

駒場野公園は、雑木林に自由に入れないし、自然公園にしては整備されすぎているように思う。管理上仕方ないのかもしれないが……。ま、それでもやまぐわの実をひろったり、てんとう虫のさなぎと卵を発見したり、子どもたちは小さな自然に出会うことができた。いちごのミニミニニサイズ形のてんとう虫のさなぎ。そのそばに、黄色いごくごく小さな粒の卵。見過ごしてしまいそうな小さい命。でも、私たちが見過ごしているから、命がつかないかかれるのかもしれない。

小さな自然発見&人間ウォッチングを楽しんだ

初めてのおさんぽ・さんぽ。幼稚園到着の時間をかなりオーバーして、幕。

### 飛ばないじゅうたん

春、幼稚園で羊のサリーちゃんの毛刈りをやった。その毛をきれいに洗って、モンゴル式じゅうたんを作ろう！ということになった。暑い日だったので、水を使うのもちょうどいいと思い。いよいよ決行。

サリーちゃんの薄汚れた、臭い毛を園庭に運ぶ。子どもたち、予想通り、「くさくさい」を連発。これは、一種の連鎖現象で、一人が「くさい」といったら、次の子はその子よりもっと大きい声で「くさい」を言わないといけないような感覚になるらしい。

とにかく、「くさい」コールがおさまるのを待って（しかし本当に強烈な臭い）大きなたらい

に水をはり、毛をつけて洗い始める。これは子どもたちが大好きな作業なので、張り切って押し洗いをしている。水を何度も変えて、何度も洗う。ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐっちゅ……。

「きれいになった」「白くなったね」と言い合いながら、ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐっちゅ……。

臭いもかなりなくなり、見違えるようにきれいになった毛を、ゴザの上に伸ばす。

水洗いで赤くなつた小さな手で、固まつた毛をほぐしながらひろげていく。次にお湯を毛にまよべんなくかけ、石鹼で表面をこする。泡立つたところを、子どもたちが、手でなせる。手のひらいっぱい、毛の感触とすべ感をキャッチしながら、みんな、平べったくなくてこすっている。

ひとしきりなげた後、ゴザでふたをして、その上に裸足になって乗り、ミュージック、スター

ト！リズムにあわせて足で毛を踏む。この時、春に「裸足になれないの」と私にいつてきた女の子が、靴と靴下を脱ぎ捨てて、ゴザの上にびよんと飛び乗ったのを目撃。満面笑み。とても楽しそうに踊っている。理屈ではなく、サリーちゃんの毛を手で触り、臭いを嗅ぐという遊びの中で体験した感覚的な何かが、彼女の裸足になりたいという衝動を押し出したように思う。この時から、この女の子はすっかり裸足大好き少女になった。

さて、モンゴル式じゅうたん。子どもたちの足で踏まれたあと、丸太を芯にしてくるくる巻き、ひもでぎゅっとしぼり、最終段階は、ひもをもつて、園庭をズルズル引きずりまわす、という具合。モンゴルと違うのは、引きずるのが馬ではなく子どもであることと、草原ではなく土の上、という点。

この違いはあとの結果に大きく響くこととなっ

た。つまり、余りに何度も引きずりまわし、おまけにゴザの間から泥が入り、出来上がりは……洗う前のサリーちゃんの水に逆戻り。子どもたちは、こんなものかなと思ったのか、プロセスを薬しんで満足なのか、冷静に事実を受け止めた様子。落胆したのは千春さんと私。泥まみれの毛をタライに戻しながら「また挑戦しよう」と誓いあった。

### シャボン玉とんだ

風も優しいし、お日様も元気。こんな日はシャボン玉日和といってもいい。園庭のけやきの木陰に机を出して、さっそく薬の調合よろしく、子どもたちの見守る中、シャボン玉液を製造する。飲む危険もあるので安心材料で。生協の液体せっけんと炭酸飲料を五十ミリリットルずつ混ぜ合わせ、使用済みの紅茶ティーバッグを入れて少し色

を出し、よく混ぜるだけ。炭酸飲料も飲み物だとわかると思わず飲んでしまう子もいるかもしれないと思い、それとわからないように入れ物を移しかえた。万全に整えて、しゃぼん玉液を作り、子どもたちに小さなカップに入れて手渡した。手渡しながらも「これは、飲んじゃだめよ」と一言付け加え……たにもかかわらず！苦虫をつぶしたような顔をした男の子一人。

「飲んだ？」

「うん」

のん気に、シャボン玉液をストローでかきまわしている彼を急がせて、うがいに走る。

他の子どもたちは次々にシャボン玉を飛ばし始めた。すべり台の上やジャングルジムの上、お気に入りの木の枝の上から、大きい小さいの、ふわふわふわ、風に運ばれて飛んで行く。シャボン玉は、幼稚園が面している淡島通りまで飛ん

でいく。信号待ちしたバスや車から、しゃぼん玉を飛ばす子どもたちに笑いかけてくれる人たちもいたりして、なんか楽しい気分。

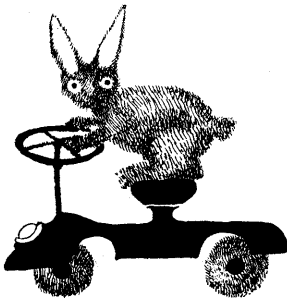
そのうち、シャボン玉を飛ばすのにあきた子どもたちは、ストローでカップに息をふうとはき、ぶくぶくぶくと山盛りの泡を作り、それをフッと吹き飛ばす遊びを始めた。小さな泡の一つ一つがつやつやと美しい。すると、三人の男の子が砂場横の水道の排水口のまわりにかがんで何かを始めた。そっと近寄ってみると、排水口にふたをして、シャボン玉液を入れ、三人はかがめるだけかがんで、ストローでぶくぶくやっている。泡がみるみるうちにふえて、山のようにふくらんでくる。時々、オウ、オウと低い歓声があがる。シャボン玉液を補給しながら、ぶくぶくぶくぶくぶく。ただ、それだけ。でも、面白そうだった。

シンプルなシャボン玉遊びだからこそ、遊びつ

づけられる安心感みたいなものがあるのかな。シャボンと戯れた一日だった。

### 水でっぼう、シュツ

暑い！こんな日は、水あそび、ということ、竹の水でっぼうを作ることにする。のこぎりで竹を切る。キリで水が出る穴をあける。持ち棒に布を巻く。子どもたちが自分で作ることを基本に、



この三つの作業をそれぞれ三人の大人が受け持つてスタートした。

一人の男の子はのこぎりで竹を切るのほとんど時間を費やしたといつてもいいくらい、頑張った。

ぎ、ぎーこ、ぎ、ぎ、ぎーこ……汗をぼたぼた流しながら竹を切り続けている。すでに完成した水でっぼうで、的は大きいほうがいいとばかりに、私のおしりめがけてシュッシュッかけてくる子がいれば、すっかりびしょぬれになっている子もいる。また、水でっぼうは一段落して、前回遊んだように、シャボン玉液を作り、排水口にかがんで、泡ぶくぶくを始める男の子たちもいる。竹をトントントン鳴らして即席太鼓を奏しむ女の子たちもいる。それぞれに遊びが展開する中、その男の子は一人、ぎ、ぎーこ、ぎ、ぎーこと竹を切っている。そして、ついにできた！

「ね、ね、ぼく、はじめて一人でやった」と静かな笑顔で言う。「はじめて一人でやった」——いい言葉だなあと思う。この子は自分一人でやり遂げた達成感に感動している。そして、私は感動している彼に感動していた。

水でっぼうの水が飛び交う中、アオスジアゲハが一匹ひらひら……。初夏のあそびはらっぱワンシーン。

\*

あそびはらっぱも夏休み。秋には、また、子どもたちのすてきな育ちを見せてもらえることを楽しみに。

時は流れて、夏から秋へ……。

(幼年童話作家)